

～二本松少年隊～



二本松少年隊群像 二本松城跡算輪門前 [1996年(平成8)7月28日設置]
制作：橋本堅太郎 [日本芸術院会員・日展彫刻家・二本松市名誉市民]

戊辰戦争－二本松の戦いにおいて、藩の兵力は仙台などの応援兵を合わせても僅かに約1千人、それに対して薩摩・長州・土佐などの西軍は約7千人、徹底抗戦の末、1868年(慶応4・明治元年)7月29日正午前、ついに二本松城は炎上し、落城しました。

落城・敗戦は誰もが予想し得たことでしたが、奥羽越列藩同盟の信義のために貫いた二本松藩の守信玉砕戦は、他藩には見られない壮絶な最期でした。戦死・負傷者の数は記録によって違いがあり、1890年(明治23)に調製された「戦死姓名簿」によると、二本松藩の戦死者337人・負傷者71人でした。負傷者数が少ないのは自分を恥じて届出をしなかったためともいわれ、また他藩の戦死者は200人を超えたといえます。

旧二本松藩主丹羽家菩提所の大隣寺境内には、戊辰戦争殉難者の戦死群霊塔とともに、二本松少年隊隊長の木村銃太郎、副隊長の二階堂衛守と、少年隊戦死者14人の供養塔が建立されています。明治維新の夜明け前に、愛する郷土そして家族を守るため、激戦の末に可憐な花を散らし、義に殉じた少年隊士を弔う参詣者の献花と香煙は、今なおその悲劇を伝えています。

戊辰戦争 とは

1868年1月3日の鳥羽・伏見の戦いから、翌年5月18日の函館五稜郭の戦いで榎本武揚らが降伏するまでの討幕派と旧幕府軍の戦争。

東北地方では5月3日に仙台・米沢・二本松など25藩が奥羽列藩同盟、さらに6日越後の6藩が加わり奥羽越列藩同盟に発展。討幕派との激しい戦いを繰り広げた末、7月29日に二本松落城、その後会津戦争となり9月22日降伏し、翌日に若松城が開城。

1「二本松少年隊」の命名

正式に編成され名が付けられた会津藩の少年16、17歳からなる「白虎隊」とは違って、二本松藩の場合は西軍（討幕軍）が二本松城下に切迫する直前に、出陣を志願した13歳から17歳までの少年たちが緊急に各部隊へ配属されたため、正式な名称はありませんでした。

1917年（大正6）9月15日、戊辰戦争後“賊軍”の汚名をかぶされ、ひたすら沈黙を通し続けてきた旧二本松藩士らにより戊辰戦没者の50回忌法要が、旧藩主丹羽家菩提所の大隣寺において盛大に行われました。

この時、二本松町の助役であり、戊辰戦争に木村銃太郎門下生として大壇口に出陣した水野好之（当時の名前は進）は、本文32ページほどの謄写版印刷した小冊子を作成し、参列者に配布しました。

表題は『二本松戊辰少年隊記』として、少年たちの服装や大壇口出陣の隊員名、激戦の様子などを回想記述したもので、この表題を基に、「二本松少年隊」と命名されたのです。そして、少年隊に対する公然的な顕彰が行われるきっかけともなりました。

2少年隊士の数

『二本松戊辰少年隊記』には、銃手として25人が列記されていますが、この数は大壇口に出陣した隊長木村銃太郎門下生等に限られています。うち、戦死者は隊長、副隊長及び隊士13人（大壇口戦死者1名を含む）、負傷者1人と記述されています。

1926年（昭和元）に刊行された『二本松藩史』には、緊急によって確実な記録がないため、記載漏れや誤記があることを断った上で、51人が列記されています。また、戦死者は隊長と副隊長を除いて14人、負傷者3人となっています。



二本松城跡箕輪門

その後、郷土史家の平島郡三郎・青山正一・紺野庫治らにより調査研究が進められて59人に増え、さらに1940年（昭和15）には2人が追加され61人となりました。

その後も紺野の調査研究は続けられ、1981年（昭和56）に刊行された『絵でみる二本松少年隊』では1人が追加されて62人となり、隊長と副隊長を除く戦死者は14人のまま、負傷者は7人に増えています。

3出陣許可と「入れ年」制度

1868年（慶応4）5月1日、西軍が白河城を占拠、二本松藩兵の大半が西軍との白河城攻防に従事している間に、6月24日棚倉城落城。一方、6月16日いわき平潟港に西軍別隊が上陸 ⇒ 7月6日守山藩降伏 ⇒ 7月13日平城落城。

このような戦況の中、同盟の三春藩による西軍への寝返りの噂もあって、二本松藩は領境の郡山・笹川・糠沢、そして小野新町に藩兵を派遣し警固にあたりました。7月26日白河より進軍した板垣退助隊は三春城に無血入城、噂された三春藩の背信でした。

二本松領に急迫した西軍に対して、二本松城は空虚同然でした。この城兵不足が少年たち、そして一度隠居した老人までも出陣するという原因ともなりました。特に、出陣を嘆願する少年たちは「入れ年」制度という慣習を巧みに解釈したのです。

「入れ年」制度とは

二本松藩では成人としての扱いを受けるのは、数え年20歳でした。しかし、18歳になった時点で藩に成人した旨の届け出をすると、藩は番入り（兵籍に入ること）を命じる慣習がありました。つまり、2歳のさばを読むことを黙認することで、これを「入れ年」といい、二本松藩独特の制度でした。

7月上旬、藩は兵力不足のため17歳まで出陣を許可しました。「入れ年」をあてはめると15歳までの少年が対象となるものの、藩の許可と部隊への配属がなければ出陣することはできませんでした。しかし、少年たちの出陣嘆願は日増しに多くなり、砲術指南木村銃太郎の門下生たちも全員で相談して、銃太郎に出陣許可の取りなしを何回となく懇願したといひます。

7月27日、本宮が占拠されたことを受けて藩は15歳までを許可、「入れ年」にすると13歳までが対象となりました。兵力不足の実情と、2歳の差を黙認するという慣習がなだれ式に崩れ落ち、数々の悲劇を生む少年たちの出陣となった

木村銃太郎肖像
(旧二本松藩お抱え絵師・大原文林筆)



のでした。

出陣許可を得た少年たちの様子について、水野好之は前記の小冊子で「七月二十六日の朝、俄然余等に出陣の命下る。余等の満足例うるに物なし。」と述べ、また15歳の木滝幸三郎は、『二本松藩史』の中で「藩庁に対し数回嘆願せしに、二十七日に至り漸く許可せられ雀躍して喜び(こ踊りして喜ぶこと。)」と語っています。出陣許可の伝達の仕方によるものか、記憶の誤りによるものか、26日説と27日説があります。

4 出陣に際してのドラマ

少年たちの出陣に際して、それぞれの家庭でのドラマが語り伝えられています。

徳田 鉄 吉 (13歳)

母・秀は“出陣の門出に、母の言うべき事ではないが、当主の佐七郎(鉄吉の兄)が不在なので…”と、戦陣での心得を諭した後に、“徳田の家名を汚す事のないよう。

また、亡くなった祖父や父の分まで忠勤を励むように。”と激励したと、後に語ったといします。

上 崎 鉄 蔵 (16歳)

一時は大喜びしていたが、時がたつにつれて物思いに沈むようになり、これを見た母・スマはその訳を問いただしたところ“恥ずかしくない刀をもって戦いたい”とのことでした。上崎家には実戦用の両刀がなかったのです。鉄蔵の気持ちを汲み取った母は、すぐに実家に駆けつけて相州ものを調達し、鉄蔵に与えました。27日の朝、出陣する鉄蔵を母は祖母と共に見送り“行ってこいよ”と、いつものように声をかけると“行ってこいよ、ではないでしょう。今日

は行けでいいのです。”と答えて玄関を出て、にっこり微笑み、ちょっと頭を下げると元気よく駆け足気味に立ち去ったといします。

戊辰戦役50回忌に当り、鉄蔵との最後の別れを語ったスマは、

“言の葉の 耳に残るや 今朝の秋”
と詠んでいます。

岡 山 篤次郎 (13歳)

最初の木村銃太郎門下生です。母に頼んで戎衣(戦場での着物)をはじめ、手ぬぐいにいたるまで「二本松藩士 岡山篤次郎 十三歳」と書いてもらい出陣しました。“母が屍を探す時にわかりやすいように。字が下手だと敵に笑われる。”との理由からだといえられています。

久 保 豊三郎 (12歳)

母に何度も出陣を願ったものの、年が満たないため許されませんでした。それでもねだるように出陣を求めたため、母は困り果て“幼いから、間近に砲声でも聞いたら恐ろしくなって帰ってくるだろう。”と考え、下男と一緒にいくことを条件に許しました。豊三郎は下男の手を引くようにして、大壇口に向って行ったといします。兄の鉄次郎も大壇口に出陣しています。

成 田 才次郎 (14歳)

父から“敵を見たら斬ってはならぬ。突け。ただ一筋に突け、わかったか。わかったら行け、突くのだぞ。”と、教諭され出陣したといします。

この突きは、初代藩主・丹羽光重公以来の二本松藩伝統の剣法です。

5 少年隊の出陣服装

『二本松戊辰少年隊記』によると、少年たちの服装は「上衣は呉呂(薄く柔かく織った毛織物・メリンスの類)、または木綿の筒袖で、力紗羽織または陣羽織を着用。下衣はダン袋、股引、義経袴、立附とまちまち。兵糧袋に肩印。帽子は用いず、白木綿の鉢巻、髪は髻を打糸で結んで背に下げた。肩印は麻の布で長さ三寸(約9センチ)、巾一寸五分(約4.5センチ)くらいで、中央に違棒の紋を書き、鯨または竹を当て、中央を紐でくり左肩先に結わいた。」と記述されています。

おそらく多くの家庭では、母が徹夜で父や兄の着物などを少年の体に合わせて縫い、何とか形のみを整えただけのものであり、少年たちの服装は当然まちまちでした。



14歳武谷剛介が出陣に帯刀した脇差

また、体が小さいため、刀を佐々木小次郎のように斜めに背負った少年や、刀を抜く時に他の少年に抜いてもらったり、あるいは二人が向かい合い腰を折って、互いに相手の刀を抜いた、と生存した少年らが伝えています。

6 大壇口への出陣

7月26日に出陣許可が伝えられると、木村銃太郎門下の少年たちは北条谷の道場に集合、その時は16人の門下生だけだったといわれています。28日朝、少年たちは箕輪門前の千人溜に集合し、ライフル砲1挺と、各々に元込め小銃と軍用金1両3分が支給され、大壇口に向けて出陣しました。

まもなく、引き上げの命令が下り、松坂門で休憩をしていたところ、午後2時頃に再び出陣の命令があり、喜び勇んで駆け足で新丁の坂を下ったため、大砲を積んだ大八車に勢いがついて桑畑に突っ込んでしまった、というエピソードが伝えられています。

午後7時頃に大壇口に着陣し、陣立てとして杵木を打ち込み、横に丸木を渡し、これに畳2枚ずつ並列し、縄でくくり付け終了したのが午後8時頃でした。その日は警戒のままに過ぎました。

少年隊62人中【数え年で、12歳1人・13歳14人・14歳19人・15歳10人・16歳12人・17歳6人】、木村門下生16人を含む25人が隊長木村銃太郎、副隊長二階堂衛守の指揮のもと大壇口を守り、他の37人はそれぞれの部隊に配属され、7月29日の激戦を迎えたのです。

7 大壇口の激戦

7月29日の朝は、霧が深かったと伝えられています。二本松兵と板垣退助隊との最初の接触があったのは午前6時半頃で、大壇口陣地では遙か杉田方面から銃声が聞こえ、しばらくして供中方面からも砲声が聞こえました。

8時頃になり、大壇口前方の尼子台に陣していた二本松隊に対して西軍の砲撃が開始されま

す。その間に板垣隊は迂回して正法寺町の集落に入り、出たところで砲列を敷き、歩兵は散開して大壇口に向かって戦闘を開始、8時半頃といわれています。

西軍は組み易しと見たのか、隊列を組んだままに少年たちの眼下に姿を現わしました。“若先生（銃太郎）、まだですか。”少年たちは撃ちたくて気がはやります。“命令を待て、もっと敵を引き付けてからだ。”大砲には、木村門下第一の砲手・岡山篤次郎と成田虎治の二人が付き、その傍には銃太郎が毅然として立ち、他の少年たちは陣立てに身をひそめ、銃を構えて敵をにらみます。

息詰まるような時が刻々と流れ、“撃てッ”銃太郎の命令が下り、篤次郎と虎治の精魂込めた速撃弾は3発とも敵の頭上で爆発、敵は慌てて散り、左右の山林に身を隠し、大砲と銃を雨あられと撃ってきました。一方、民家にひそんだ敵を砲撃したところ見事に命中し、民家51軒を貫いたといいます。この砲撃の確実さには西軍も驚いたほどで、一弾一弾よく目標に的中したと後に西軍の隊将が語っています。

しかし、多勢に無勢、新式銃を使い、統制ある巧みな近代戦法の西軍は包囲態勢を整え、徐々に少年たちを攻め立ててきます。

“若先生、午之助がやられました。”遠くで叫ぶ声がしました。少年隊最初の戦死者である奥田午之助でした。少年たちは初めて戦争という実体験を、間じかに見せつけられたのでした。仲間の命を奪われた少年たちは、弔い戦と奮起し、激しく向い撃ちました。

こうした中、ついに隊長が敵弾で左腕を撃ち抜かれ重傷を負い、“もはやこれまで”と退却を決断し、自ら集合の太鼓を打ち鳴らします。敵は目前に迫り危険な状況となった時、追い討ちをかけるように敵弾に腰を撃ち抜かれ、その場に倒れました。

“この重傷では到底お城には帰れぬ。我が首を取れ。”と副隊長に命じます。少年たちは銃太郎を励まし、一緒に退却するよう懇願しましたが、“押し問答する時ではない。早く切れ。”と促し、副隊長は心を決め銃太郎の首を切り落としました。その瞬間、少年たちは一斉に号泣したといいます。

そして、少年たちは副隊長の指示に従い、泣きながらも銃太郎の屍を急いで埋め、首を下げ持ち、引き上げることになりました。隊長・副隊長の指揮のもと、わずか25人の少年で抗戦した大壇口の戦いは幕を閉じました。午前10時頃でした。



大壇口古戦場を見下ろす丘〔右端：木越安綱歌碑〕

～敵将・野津七次の回顧談～
(後の元帥陸軍大将・野津道貫)

“兵数不詳の敵兵は砲列を布いて、我が軍を激撃するのであった。我が軍は早速これに応戦したが、敵は地物を利用して、おまけに射撃がすこぶる正確で、一時我が軍は全く前進を阻害された。我が軍は正面攻撃では奏功せざる事を覺り、軍を迂回させて敵の両面を脅威し、辛うじて撃退する事を得たが、恐らく戊辰戦争中、第一の激戦であったろう。”

～うつ人も うたる人も 哀れなり

共にみくにの 民と思えば～

戊辰戦争の悲壮さをうたった野津の詠歌です。

また、大壇口古戦場の付近には、野津に勧められて1930年(昭和5)当地を訪れた陸軍中将の木越安綱が詠んだ歌碑が建立されています。

～色かへぬ 松間の桜 散りぬとも

香りは千代に 残りけるかな～

8 少年隊の戦死

少年隊士62人のうち、壮絶な戦死を遂げた少年は14人を数えます。

◎奥田午之助(15歳)

大壇口で敵弾により戦死しました。

◎高橋 辰治(13歳)

大壇口で顔面を負傷、その後郭内まで引き上げ、日暮れ頃に西軍に斬りかかり、二ノ丁で戦死しました。

◎遊佐 辰弥(13歳)

新丁にあった自宅付近の松の木の下に、袈裟掛けに斬られた屍が置かれていたといひます。

◎徳田 鉄吉(13歳)

自宅前に屍が置かれ、顔に白布がかぶされていたといひます。

◎岡山篤次郎(13歳)

大壇口から撤退の途中、大隣寺前の参道で狙

撃により副隊長は即死、篤次郎は腹部貫通し、本町称念寺の仮設野戦病院に収容された後に絶命しました。

◎成田才次郎(14歳)

重傷の身で西谷町から城へ向かう途中に長州兵と出会い、一瞬の油断をみて敵将の白井小四郎を突き殺した後、その場で絶命。出陣に際し、父の教えをけなげにも守った末の戦死でした。

◎木村丈太郎(14歳)

遊佐辰弥に前後して、屍が置かれていたといひます。

◎大桶勝十郎(17歳)

新丁で屍が発見されたといひます。

以上、8人が大壇口出陣の少年たちでした。

◎小沢 幾弥(17歳)

愛宕山に師の朝河八太夫(砲術師範、朝河貫一の祖父)とともに出陣し、共に重傷を負い、師を背負いながら退去の途中、大手門(坂下門)前で八太夫の絶命を知り、屍を手で掘り埋めたといひます。その後、久保丁坂の中ほどで土佐兵と遭遇したが、精根尽き果てたためか介錯を頼み、その場で絶命、生爪がはがれていたといひます。

◎根来梶之助(16歳)

父で大城代の内藤正置が戦死した場所・箕輪門前の脇の城壁直下近くで戦死しました。

他に、田中三治(16歳)・上崎鉄蔵(16歳)・岩本清次郎(17歳)・中村久次郎(17歳)が戦死していますが、その状況はわかっていません。

武谷剛介の回顧談

“藩のため戦争に出て戦うことは、武士の子として当然の事であって、特に語るべきことではない。恐ろしいとは思わなかった。出陣の前夜などは、今の子どもの修学旅行の前夜のようなはしやぎようだった。”



大隣寺境内の少年隊戦死者供養塔

戊辰戦争出陣【二本松少年隊士】名簿

※年齢：数え年 区分◎◎：大壇口出陣者・うち◎は木村銃太郎門下生

No.	氏 名	年齢	区分	死傷	墓 所	No.	氏 名	年齢	区分	死傷	墓 所
1	久保豊三郎	12	○	負傷		32	山岡房次郎	14			
2	上田孫三郎	13	◎			33	山田左馬吉	14			
3	伊藤 孝蔵	13				34	山田英三郎	14			
4	高橋 辰治	13	◎	戦死	心安寺	35	丹羽寅次郎	15			
5	遊佐 辰弥	13	◎	戦死	本久寺	36	武藤 定助	15			
6	徳田 鉄吉	13	◎	戦死	心安寺	37	平島太郎八	15			
7	大島 七郎	13	◎	負傷		38	奥田午之助	15	○	戦死	台運寺
8	森 辰蔵	13				39	安部井壮蔵	15	○		
9	加藤 犬蔵	13				40	鹿野寅之助	15			
10	岡山篤次郎	13	◎	戦死	蓮華寺	41	久保鉄次郎	15	○	負傷	
11	成田 達寿	13				42	木滝幸三郎	15		負傷	
12	小川安次郎	13	○	負傷		43	大石 岩蔵	15			
13	沢田勝之介	13				44	磯村 力	15			
14	後藤 鈔太	13	◎			45	三浦 行蔵	16	○	負傷	
15	高根源十郎	13	○			46	浅見 四郎	16			
16	成田 虎治	14	◎			47	田中 三治	16		戦死	顕法寺
17	武谷 剛介	14	◎			48	根来梶之助	16		戦死	台運寺
18	西崎 銀蔵	14				49	中村文太郎	16			
19	全田 熊吉	14	◎			50	毛利亥之次郎	16			
20	宗形 幸吉	14	◎			51	青山三七郎	16			
21	堀 良輔	14				52	下河辺武司	16			
22	成田才次郎	14	◎	戦死	大隣寺	53	上崎 鉄蔵	16		戦死	台運寺
23	馬場 定治	14	◎			54	小山 貞治	16			
24	青山卯之吉	14				55	大関 勝弥	16			
25	水野 進	14	◎			56	松田 馬吉	16			
26	鈴木松之助	14	○			57	岩本清次郎	17		戦死	蓮華寺
27	木村丈太郎	14	◎	戦死	心安寺	58	大桶勝十郎	17	○	戦死	善性寺
28	高橋 七郎	14				59	松井 官治	17			
29	渡辺駒之助	14	◎			60	小沢 幾弥	17		戦死	法輪寺
30	寺西久太郎	14				61	中村久次郎	17		戦死	台運寺
31	三浦 斧吉	14				62	小川 又市	17		負傷	

【大壇口出陣少年隊指揮者】

※共に戦死

職名	氏 名	年齢	墓 所	身 分
隊長	木村銃太郎	22	正慶寺	4人扶持広間番大砲方
副隊長	二階堂衛守	33	大隣寺	6人扶持広間番

～二本松少年隊～

平成22年10月 編集：二本松市教育委員会文化課
令和5年4月 発行：二本松市教育委員会文化課